

グループ・ダイナミックスの観点より見た ロシア極東シカチ・アリャン村における古代岩絵を 観光資源とした村おこしに関する考察

—文化的アイデンティティと文化財の保護—

A study on the revitalization of Russian far east, Sikachi-alyan village by using ancient petroglyphs as touristic resources from the perspective of group dynamics

—Cultural identity and cultural protection—

井出晃憲¹

Akinori IDE

Abstract

Nanai people are the indigenous minority group who live on the banks of the Amur river. And currently reside both in Russian and China. Sikachi-Alyan is the small village in Russia with the population of 350 people famous as the residence of Nanai people as well as for petroglyphs that are estimated to be as much as 12 000 years old.

Many ethnic minorities are dealing with a difficult challenge of maintaining their language, culture and traditional livelihood and Nanai people are no exception. Promotion of the migration by Russians and Han Chinese to the areas along Amur river by Russian and Chinese governments contributed greatly in spreading Russian and Chinese language and culture in the region. Moreover, the explosions at the chemical plant in Jilin province, China, in 2005 severely polluted Amur river that provides livelihood for Sikachi-Alyan causing the government to ban fishing and therefore putting Nanai village on the verge of survival.

On the other hand, we can see some tendencies towards legal recognition of the land ownership for indigenous peoples and the recovery of the indigenous languages and culture as it is being promoted by the “United Nations Declaration on the Rights of Indigenous People” adopted by UN General Assembly in 2007.

For many years petroglyphs as the national cultural heritage were under the jurisdiction of the Government of Khabarovsk region however recently its jurisdiction was attributed to the village. Petroglyphs are the cornerstone of the cultural identity of the Nanai people. The NPO Eurasian Club to which the presenter belongs in collaboration with the people of Sikachi-Alyan has launched a project that intends to revitalize the village by turning it into a tourist destination with petroglyphs being the main attraction.

For the preservation of the existing petroglyphs we rubbed them in 2008. Rubbing technique is an important method of the documentation of the cultural heritage as it allows faithfully reproduce the

1 文教大学国際学部非常勤講師、同湘南総合研究所准研究員

original without causing any damage to it. Cultural heritage itself might deteriorate with time, and rubbing technique allows recording it in full-scale at some point of its existence as well as creating the two-dimensional copies from three-dimensional original heritage.

Currently we are planning on holding the exhibition of rubbings for tourism promotion in Japan and its success greatly relies on the cooperation of the NPO and the village.

Finally the theory of group dynamics is adopted to describe this project.

Keywords

ナナイ民族、ペトログリフ、村おこし、観光資源、グループ・ダイナミックス

(目次)

- 1、はじめに一フィールド簡介
- 2、NPO法人ユーラシアンクラブのこれまでの取り組みと将来像
- 3、「先住民族の権利に関する国際連合宣言」の採択
- 4、岩絵の概観について
- 5、ナナイの文化的アイデンティティとしての岩絵
- 6、文化財記録のための採拓作業
- 7、拓本技術の有用性について
- 8、NPO法人ユーラシアンクラブとシカチ・アリヤン村民のコラボレーション
- 9、グループ・ダイナミックスの観点より見た本プロジェクト
- 10、おわりに一先住民の文化財保護と観光資源化に向けて

1、はじめに一フィールド簡介

ナナイ民族²、そして彼／彼女らが集住するシカチ・アリヤン³という村落が存在する。⁴ ナナイ民族は、アムール河中流からウスリー河、松花江にかけて、つまりロシアのハバロフスク州、沿海州、中国の黒竜江省にまたがる地域に分散居住する先住民族である。⁵ ナナイの名は、ロシアの探検家アルセーニエフの著書で、黒澤明監督によって映画にもなった『デルスウ・ウザーラ』⁶ で有名である。アルセーニエフは、1906年から1907年にかけてウスリー地方を探検したが、

ナナイの卓越した獵師であるデルスウ・ウザーラと行動を共にし、友情を深めた。シカチ・アリヤン村は、ハバロフスク州領内にあり、同市から北東に80kmほど離れた場所に位置する人口わずか350人ほどの村で、ナナイ民族を主体とした少数民族村として名高い。また当地のアムール河の岸辺には1万2千年前とも推定される古代岩絵が点在することでも有名である。本論文は、その古代岩絵を観光資源化して村おこしをしようという筆者の所属するNGO（特定非営利活動（NPO）法人ユーラシアンクラブ）で現在

2 「ナナイ」は自称で“土地の人”を意味する。ロシア側ではかつてゴリドという呼称で呼ばれ、中国側では現在に至るまで赫哲（ホジェン）と呼ばれている。

3 旧称はサカチ・アリヤン。現在はシカチ・アリヤンと呼称されている。

4 (図1) 参照のこと。

5 統計によると、ロシア側に1万1883人（1989年）、中国側に4254人（1990年）という。（『世界民族問題事典』（平凡社・1995年）による。）

6 アルセーニエフ著／長谷川四郎訳『デルスウ・ウザーラ 沿海州探検行-』（平凡社東洋文庫55・1965年）
原著：Владимир Клаудиевич Арсеньев “ДерсуУзала”（Молодая Гвардия・Москва・1930年）

進行中のプロジェクトについて考察を進めたものである。

上述した地域は考古学上アムールランドと呼ばれ、日本とユーラシア大陸をつなぐ結節点の一つでもあり、当該地域の諸民族は、周辺地域との関わりにおいて大きな役割を果たしてきた。⁷ その意味からも当該地域の先住民族が現代において文化の継承者として自立・共生することは大きな意味があると考えられる。

だが、アムールランドの少数先住民族も他の例にもれず固有の言語・文化・生業を維持するのが非常に困難な状況に陥っている。ロシア・中国両政府がともにロシア人あるいは漢族の移住を促進しており、ロシア領内では言語・文化のロシア化、中国領内では漢化が進んできている。ナナイ民族も同様である。

そうした状況のなか、アムール河が思わぬ災害に見舞われることとなった。2005年に発生した中国吉林省の化学工場の爆発事故によって、汚染物質が推定100トンも流失したのである。⁸ その影響は大きく、汚染物質は松花江から下流のアムール河にも到達し、シカチ・アリヤン村をも襲った。そのため生業である漁業が原則的に禁止されることとなり、村の中心的な収入源であるサケ・チョウザメの類が獲れなくなり、村は現在深刻な存亡の危機に直面している。

2、NPO法人ユーラシアンクラブのこれまでの取り組みと将来像

NPO法人ユーラシアンクラブは、これまで過去約20年間にわたってシカチ・アリヤン村との交流や村への支援を進めてきた。支援の実例としては、村内にキャンプ用地を購入してエコツアーリズムを主催したり、キノコ採取の指導をしたり、民芸品製造のために中古ミシンや不要なカーテン生地を寄贈したりなどしてきた。また、

人的交流としては、日本においてマタギ・サミットを開催してナナイ民族の猟師をパネリストとして招いたり、研修生としてナナイ人青年を受け入れたりなどしてきた。また、2003年には、ユーラシア芸能祭と銘打った大規模なフェスティバルを同地で催した。今回の古代岩絵の観光資源化という試みは、突発的な思いつきに基づくものではない。長期にわたる関わりから醸成されたNPO法人ユーラシアンクラブと村の人々との信頼関係の上に発案されたものなのである。本プロジェクトでは、まず第一に日本国内の複数の博物館等の展示施設を巡回して古代岩絵の拓本の展覧会を催し、少しでも日本人々にシカチ・アリヤン村の現状を理解してもらうことを主眼としている。その上で望ましい将来像としては、古代岩絵の観光資源化によって、村での雇用が創出され、出稼ぎ労働に従事する村の男性たちが村に戻ることである。⁹

3、「先住民族の権利に関する国際連合宣言」の採択

一方、現在ではようやく先住少数民族の間でも土地に対する優先的な権利や固有の言語・文化の回復を主張する動きが見られるようになってきている。それを後押ししているのが、2007年9月13日の第61期国連総会において採択された「先住民族の権利に関する国際連合宣言」である。その第12条には、「先住民族は彼／彼女らの文化的伝統と慣習を実践しかつ再活性化する権利を有する。これには、考古学のおよび歴史的な遺跡、加工品、意匠、儀式、技術、視覚芸術および舞台芸術、そして文学のような過去、現在および未来にわたる彼／彼女の文化的表現を維持し、保護し、かつ発展させる権利が含まれる。」とうたわれている。

シカチ・アリヤン村の場合、以前には村の確

7 例えば、佐々木史郎『北方から来た交易民—絹と毛皮とサンタン人』（日本放送出版協会・1996年）に詳しい。

8 在瀋陽日本国総領事館HPより

http://www.shenyang.cn.emb-japan.go.jp/jp/connection/security/security_1_16.htm

9 東京新聞2009年1月5日朝刊24面「古代岩絵で村おこし」（巻末（資料1）を参照のこと。）

固とした領域もなく、選挙はあっても任命制であったり、同村に存在する岩絵もハバロフスク地方政府の管轄に属する国の文化財であったりした。そのため、村が自由に岩絵の扱いを決めることもできなかつた。岩絵を観光資源として活用することなど不可能だったわけである。それが最近になって岩絵の管轄権が村に与えられたという経緯がある。それは村長のN女史が静かに語り続けた成果である。それでも、岩絵の分布地が、隣接するロシア人を主体としたマルシェボという町と先住少数民族の権限のない別の集落の2つの地域に分断されているという難点はある。¹⁰ そのため都市開発や港湾建設ですでに失われてしまった岩絵も多い。ナナイの人々にとって、岩絵はいわば民族のよりどころである。管轄権が移行されたというこのささやかな一歩も、先住民にとっては大きな一歩だ。現在、存亡の危機に立たされているシカチ・アリヤン村の今後の発展のために、観光資源とすることをはじめ岩絵を活用した様々な取り組みが可能となった。この国連宣言にあるように、先住民族が自らの文化的表現を維持・保護・発展させることは大変重要かつ当然の権利であると考えられよう。

4、岩絵の概観について

シカチ・アリヤンを訪れた学者としては、すでに19世紀末に有名なアメリカの東洋学者で東洋文化の研究者であったパーソルド・ラウファーや、また20世紀の20年代には、学界で前者に劣らず有名な日本の鳥居龍蔵教授を挙げることができる。¹¹ だが、岩絵を調査した学者で最も著名なのは、アレクセイ＝パヴローヴィチ＝オ

クラードニコフ博士(1908～1981)である。博士は長年レニングラード物質文化史アカデミーに所属するとともに、レニングラード大学教授として史学部および東洋学部でシベリア・極東の考古学を講義した。極東の調査では、1935年にアムール河流域をハバロフスクから河口まで調査したのを皮切りに何度か調査を行っている。¹²

「アジア大陸の古代住民の美術史の中で、アムール河岸とウスリー河岸の崖壁画は特別の地位を占めているが、その中でサカチ・アリヤン¹³のものが特に重要である。」とオクラードニコフは述べている。¹⁴ オクラードニコフはシカチ・アリヤンの岩絵群に強烈な印象を持ったことが知れる。

オクラードニコフによる岩絵の類型は以下のとおりである。¹⁵

まず、画像のレパートリーの第1位はマスク(人面)である。それは、全体の輪郭によって8つの基本的グループ、つまり楕円形、卵形、ハート形、梯形、四角形、上が楕円形で下が真っすぐな四角形、サルまたはどくろ形、輪郭無しに目と口だけを穴で示した分割形に分けられる。第2位はオオシカまたはトナカイの画像である。以下、第3位はヘビ、第4位は鳥、そして、その他に抽象化された小舟がある。

そのうち第1位のマスクについては、祭りの舞踊儀礼、埋葬儀礼、狩猟的パントマイム、死者の霊、豊穡の呪術的儀礼(死に対する生の戦い、人類の存続)シャーマン(生きている死者、野獣、鳥)のマスク(霊への変容)を表しているとされる。

また、岩絵製作の年代について、1万2千年前と推定されると述べたが、その根拠は以下の

10 巻末(写真1)を参照のこと。

11 鳥居龍蔵は、1919年と1921年に同地を訪れている。詳しくは、鳥居龍蔵『人類学及人種額上より見たる北東亜細亞』(岡書院・1924年)、同『黒龍江と北樺太』(生活文化研究会・1943年)を参照のこと。

12 菊池俊彦「オクラードニコフ博士—その生涯と業績」『考古学ジャーナル』(ニュー・サイエンス社・1982年10月)

13 シカチ・アリヤンの旧名称である。

14 アレクセイ・オクラードニコフ著、加藤九祚、加藤晋平訳『シベリアの古代文化—アジア文化の一流流—』(講談社・1974年)90-93頁

15 アレクセイ・オクラードニコフ著、加藤九祚、加藤晋平訳 前掲書93-102頁

理由による。シカチ・アリヤン村にほど近いアムール河沿いの河岸段丘にガーシャ遺跡と呼ばれる古代の住居址があり土器が出土した。その土器を、放射性炭素を用いた年代測定で測ったところ、前12960年プラスマイナス120年と出たのである。そこから、付近のアムール河岸の岩絵群も同時代のものと推察されたのである。¹⁶

5、ナナイの文化的アイデンティティとしての岩絵

この項では、現代のナナイ民族がいかにアムール河岸の古代岩絵群を自らの文化的アイデンティティとして認識しているかを示したい。そのために古代岩絵群とナナイ民族の創世神話との関連について考察することとする。「芸術的伝統の連続は、したがって様式、芸術形式、具体的テーマだけでなく、これらのテーマに結びつく理念（イデー）の継承の可能性を意味している。言い換えれば、現代のナナイ族の神話や民間伝承の中に、アムール河岸とウスリー河岸の不思議な岩壁画世界をつくり出した理念は残されていないだろうか。そして実は残されていたのである。」¹⁷ 岩絵の起源について尋ねると、「ナナイ族は、これらの画像がいつ誰の手でつくられたかの間に対して、その起源が三つの太陽と偉大な射手のいた神話的時代、創世の時代と結びついていると異口同音に答えている」¹⁸とオクラードニコフは述べている。

筆者は2012年夏にシカチ・アリヤンを調査で訪ね、岩絵にまつわる説話のアンケート調査を実施した。無作為抽出で30人に対し行ったところ、14名が射日神話を記してくれた。例えば、以下のような話である。

1、昔々、空に三つの太陽が輝いていた。とても熱かったのでアムールは煮え立っていた。石は蝟

燭のように溶けた。人々は暑さを避けて地下に潜り、夜にだけ新鮮な空気を吸いに外に出ていた。ひとりのメルゲンが二つの太陽を殺して一つを残すことに決めた。彼は魔法の弓と矢を手にとった。最初の太陽が出たとき、メルゲンはそれを打ち落とすとした。二つ目の太陽が出たとき、メルゲンがそれを打ち落とそうとしたが、失敗した。三つ目が出たときメルゲンが矢を放って、打ち落とすとした。こうして唯一の太陽が残った。人々は喜び、大きくこれを祝った。

2、

シカチ・アリヤンの岩絵は19世紀以前にもう出現した。つまり最初に19世紀以前にロシアの東洋学者パラジイ・カファノフがこれを見た。ナナイの間には岩絵の起源についての伝説がある。空には一つでなく三つの太陽があった。地上は大変暑くて石は粘土のようだった。そこでハドという獵師が二つの太陽を射落とすことにして、日の出を待って、弓と矢をとった。最初の太陽が出たとき、獵師がそれを射落とすとした。二つ目にはあたらず、三つ目にあたった。残った真ん中の太陽が照り続けている。そして石がまだ冷えないうちに人々が自分の住処から出てきて、絵を描いた。つまり、指で石を圧迫した。それらしい岩絵、絵が石に残った。

3、

遙かなる大昔、地上ではナナイ人が幸せに暮していた。彼らには魚も肉もすべてがあった。しかし、彼らが山や森、水、火の主人フレイ(?)を崇拝するのをやめて以来、諸霊が怒り、太陽にさらに二つの太陽が現れた。地上では非常に暑くなり、アムールの水が煮え立ち始め、息をするのも苦しくなった。石は融け、タールのような雨が降った。人々は誤りを悟った。そして獵師のハドに二つの太陽を殺してくれるように

16 大貫静夫著『世界の考古学(東北アジアの考古学)』(同成社・1998年) 36頁

17 アレクセイ・オクラードニコフ著、加藤九祚、加藤晋平訳 前掲書119頁

18 アレクセイ・オクラードニコフ著、加藤九祚、加藤晋平訳 前掲書119頁

頼んだ。太陽が一つ残ったとき、石が冷え始め、人々は石にこの出来事について、彼らの罪について後世につたえるために絵文字を描いた。

4、

大昔あるとき人々が暮していた。あるとき悪霊がさらに二つの太陽を創造した。太陽が三つになった。すべての生き物は暑さから死に始め、河の水は煮え立った。石は溶けた。そこでひとりの勇敢な若者があらわれ、弓矢をとって日没のときに出かけた。太陽が沈み始めたとき、彼は二つの太陽を殺した。そしてすべては以前のようにになり始めた。そしてまだ石が冷めないうちに人々が三つの太陽を記録するために指で石の上にさまざまな絵を描いた。

これらの話は数ある射日神話のうちのいくつかのバージョンである。

「ツングース・満州語派に属して同一グループを形成するナナイ・ウリチ・オロチ・ウデゲ・オロッコなどの各民族はそれぞれ多くの射日神話を伝承してきた。

これらアムール、サハリン、沿海州に居住する各民族の伝統文化には、起源を異にするさまざまな要素が認められる。土着の基層文化以外に、北方トゥングース語系の民族（エヴェンキ、エヴェン）と共通する文化、チュルク・モンゴルのな特徴、満州・中国からの影響などが認められるのである。この文化の多源性は、神話・伝承についても明らかに認められる。」¹⁹と荻原真子は述べている。

神話・伝承にも文化的な多源性はあるものの、現在もなお一部のナナイ人の間では、古代岩絵についての説話が語り継がれていることが判明した。

さらにアンケートにおいて「あなたにとってペトログリフは民族の拠り所と感じられます

か？」という質問事項に対して、30名の回答者のうち、「強くそう感じる」17名、「そう感じる」8名で、合計して83%の回答者が強弱はあるものの、ペトログリフ（古代岩絵）に民族の拠り所を感じていることが判明した。

この結果からも、シカチ・アリヤン村の村民にとって岩絵が文化的アイデンティティの拠り所のひとつとして重要性も持っていると言えるだろう。

6、文化財記録のための採拓作業

近年における日本人研究者によるシカチ・アリヤン等の遺跡調査は、北方ユーラシア学会によって1993年8月28日～9月10日に行われている。

この調査は、3か所で実施された。1つ目はシカチ・アリヤン遺跡。2つ目はハバロフスクからウスリー河を約70km上流に遡ったところでウスリー河に注ぐキヤ川に面したチェルトヴァ・プリヨーサ遺跡。3つ目がハバロフスクから南に約150kmの、ウスリー河に面したシェレメチェボ遺跡である。この調査は、オクラードニコフを中心に調査実施された1971年の調査の報告を基に、岩絵を含む地形の測量と実測・拓本採取を目的としたが、測量は増水のために不可能であった。シカチ・アリヤン遺跡はアムール右岸に位置し、第1ポイントから第6ポイントまでの6か所に分かれており²⁰、この調査ではこのうち第1、第2および第4ポイントで採拓が実施された。²¹

筆者が参加したNPO法人ユーラシアンクラブによる採拓調査は、2008年の9月29日から10月3日に実施された。実際の採拓期間は9月30日から10月2日にかけての正味3日間であった。アムール川の水量の最も少ない時期を選ぶとともに、拓本の専門家集団を招いて集中的に行われた。専門家集団は大阪に本部を置くアンコールワット拓本保存会という団体であり、アンコールワッ

19 荻原真子『東北アジアの神話・伝説』（東方書店・1995年）119頁

20 巻末（図2）および（資料2～6）を参照のこと。

21 鶴丸俊明『極東古代絵画の記録保存、分布調査事業から—サカチ・アリヤン遺跡等の調査—』による。

トでの遺跡の採拓では大いに実績がある。²²

シカチ・アリヤンの岩絵は上記のとおり第1ポイントから第6ポイントまでの6か所に集中しており、我々は第1、第2、第3ポイントで採拓を行った。第4ポイントの岩絵は岩壁の上部の採拓できない場所に2、3あるのみで河原にはすでに存在していなかった。第5、第6ポイントはマルシェボというロシア人入植者を中心とした隣町に位置しており、港湾工事の影響によってか既に失われていた。それでも我々は3日間の調査で合計32点の岩絵を採拓することができた。

7、拓本技術の有用性について

2008年の現地調査の中心は古代岩絵の拓本を採取することであった。文化財の記録の方法としての拓本技術の有用性に関することを指摘しておくことは、以前にも言及したことがあるが、非常に重要であると考える。²³

拓本技術は、古代中国において複写法・印刷法の一つとして発明され、わが国に遣唐使によってもたらされたといわれる。しかし、墨の文化のひとつである拓本が日本で普及発展しなかったのは、その特性である複写性・記録性のみが重視され、芸術性・創造性を追求しなかったからである。つまり生命感を求める美的表現を疎かにした形写しであったからだという。²⁴

拓本技法には、碑面に直接墨を塗る直接法はない。必ず碑面の上に紙を貼り、その上から墨で摺り写す間接法である。原版を汚さずに、原版と同形の文字・文様・図像を表現する複写法である。版画技法は、原版の上に直接墨を塗ってから、その上に紙を置き、原版に刻された文字・文様・図像などを、バレンで摺り写してか

ら剥がす。すると紙面に表現された図像は、原版の図像とは反転してしまい、しかも原版の上には墨が残ってしまう。²⁵ つまり拓本技法は、原版を忠実に再現でき、また原版を損なうことがないのである。²⁶

文化財という物自体は劣化していくが、拓本は、文化財のある時点での瞬間を実物大で記録できるテクノロジーである。3次元を2次元に写し取るために持ち運びも容易となる。しかも、採拓の仕方によって個性も生まれ、芸術性や創造性という付加価値も発生するのである。

現在NPO法人ユーラシアンクラブでは、採拓した古代岩絵の拓本の展覧会を計画中だが、上述した拓本の特性を生かした展示方法を模索しなければならないと考えている。拓本というテクノロジーの価値を高めるための展示の方法を検討する必要がある。

8、NPO法人ユーラシアンクラブとシカチ・アリヤン村民のコラボレーション

2012年夏にシカチ・アリヤンを調査で訪ねた際に筆者が行ったアンケートに立ち返ろう。

「日本のNPO法人ユーラシアンクラブのことを知っていますか？」との問いには、「よく知っている」が9名、「知っている」が9名、「どちらでもない」が1名、「よく知らない」が5名、「まったく知らない」が7名であった。

「日本のNPO法人ユーラシアンクラブがペトログリフの展覧会を日本で開催する予定であることを知っていますか？」との問いには、「よく知っている」が3名、「知っている」が6名、「どちらでもない」が4名、「よく知らない」が4名、「全く知らない」が12名であった。

「ペトログリフを観光資源にしてシカチ・アリ

22 『神々と王の饗宴 アンコールワット拓本展』(2003年)を参照のこと。

23 「古代岩絵の観光資源化による地域振興の試みに関する考察—ナナイ人の居住するロシア極東シカチ・アリヤン村の事例—」『湘南フォーラム2010』(2010年)180-181頁を参照のこと。

24 内田弘慈『拓本のすすめ』(国書刊行会・1992年)「まえがき」による。

25 内田弘慈 前掲書36-37頁による。

26 採拓の様子は巻末(写真2・3・4)を参照のこと。

ヤン村を活性化することに賛成ですか？」との問いには、「強く賛成する」が21名、「賛成する」が6名、「どちらでもない」が2名、「反対する」が1名、「強く反対する」が0名であった。

まず、「日本のNPO法人ユーラシアンクラブのことを知って」いるかという問いには、強弱含めて18名が「知っている」と回答しており、過去20年に渡ってシカチ・アリヤン村と交流し支援してきただけあって、その認知度はかなり高いと云える。このアンケートの回答者には未成年も含まれているため、「知らない」という選択肢は未成年が多く回答したものと思われる。「ペトログリフを観光資源にしてシカチ・アリヤン村を活性化する」ことに関しては、強弱含めて「賛成する」が27名と全体の9割を占めた。やはり村民の間にも村の危機的状況が共通認識としてあるのだろう。ところが、「ペトログリフの展覧会を日本で開催する予定であることを知って」いるかという問いに対しては、強弱含めて9名しか「知って」いないという結果であった。

現在必要なことは、日本での展覧会開催の予定を広く認知してもらい、村人の協力を得ながら開催に向けて準備することである。幸い村には古くからNPO法人ユーラシアンクラブに協力してくれている仲間がいる。その中に村の将来を憂いて活動している女性がいる。村長のN女史と伝統文化伝承者で学校の教師のB女史の2人である。この2人が、今回のNPO法人ユーラシアンクラブが提起したプロジェクトである岩絵の観光資源化に率先して賛同してくれたのである。さらに協力者として、シカチ・アリヤン村の女性と結婚したハバロフスク州文化局の考古学者のR氏もいる。筆者も参加したNPO法人ユーラシアンクラブによる2008年の調査および採拓、さらに2012年の調査においても彼らは積極的に協力してくれた。彼女らに賛同して協力する村民をいかに増やしていくか、岩絵の観光資源化への道のりを緩慢ではあってもいかに進歩させていくかが今後の課題となろう。

筆者も含めたNPO法人ユーラシアンクラブと

シカチ・アリヤン村の村民とのコラボレーションの動態を把握して詳細に記述していくことが、研究上の次の課題となるが、次節で述べるように、研究者とその研究対象を一つの集合流ととらえるグループ・ダイナミックスの手法が非常に有力なツールであると思われる。

9、グループ・ダイナミックスの観点より見た本プロジェクト

筆者は、本プロジェクトを、存亡の危機に立たされているナナイ民族のためにも、また、先住民族主体によって観光資源を活用した村おこしという事例を一般化してインターローカルなものとして広く紹介するためにも、エスノグラフィとして刻銘に記録し、さらに理論化する必要性を強く感じている。その際、有力なツールとなるのがグループ・ダイナミックスの手法ではないかと考えている。なぜなら、研究者である筆者がNGO（特定非営利活動（NPO）法人ユーラシアンクラブ）のスタッフであり、かつこの古代岩絵の観光資源化のプロジェクトの日本側事務局を務めており、云わば集合流の当事者の一人であるからである。それゆえ、このプロジェクトは、筆者およびNGOと村民集団との間の協同的実践の行為となる。さらに、このプロジェクトは現在進行形のかたちで進められている事象であり動態的であるからである。それゆえ、筆者の参与観察や実践の如何によってどのような道に進んでいくかは不確定である。

ここでは、グループ・ダイナミックスの理論のうち活動理論を援用して本プロジェクトを概観してみたい。もちろん、本プロジェクトは実施途上段階であるので、将来の事象に関しては希望的観測の域を出ないものではある。

活動理論に基づけば、新しい活動がいかにして誕生するかを述べることができる。それと同時に、活動理論は、新しい活動を誕生させるにはどうしたらいいのかという課題に対する実践的指針を与えてくれるものである。「その指針は、第一に、いかに個人の能力、性格の問題に

見えようとも、あくまでも社会的・文化的文脈、歴史的な文脈をもった「活動」として捉えなければならぬこと、第二に、活動に潜在する矛盾、そして、その矛盾の顕在化であるダブルバインドこそ、新しい活動を創造するエネルギーであること、第三に、矛盾を創造に変換するのは「新しい道具」であることを主張している。」²⁷とされている。

シカチ・アリヤン村における古代岩絵という遺跡の観光資源化の場合には、まず第一に、社会的・文化的文脈、歴史的な文脈としてアムールランドという地域の特性がある。遺跡もその文脈上から解釈されなければならない文化的資源である。そして第二に、アムール河の汚染によって漁業という生業を行うことができなくなるという外在的な矛盾を抱えた。また、遺跡は村民にとっては伝説上の時代から引き続いて文化的な拠り所となってきたものの、その管理はハバロフスク州の地方政府に委ねられているという内在的な矛盾を抱えていた。そうした諸矛盾の顕在化がダブルバインド状況を形作り、遺跡の観光資源化による村おこしという新しい活動を創造するエネルギーとなった。さらに第三に、2007年に採択された「先住民族の権利に関する国際連合宣言」が後押しとなり、遺跡の管轄権が村に与えられた。それが「新しい道具」、云わばスプリングボードとなり、村を新たな創造へと導いている。

現在は村おこしの途上であり、村民とNGOが主体となって遺跡利用のあり方を検討している最中である。今後は、これまで放置されてきた遺跡の観光資源化によって村が発展していくことが期待される。その際には、主体はもちろん村民であるが、NGO、さらにはエコツーリズムなどで訪れた観光客も遺跡の保護や利用について考え、積極的にそれに参加することが求められる。そして、これまでは遺跡が村おこしの道

具であった状況から、地域全体がエコツーリズムなどの観光の対象となり村おこしの道具となるであろう。こうした村の発展の道筋の概略を図として表してみた。²⁸

図には大きな3つの三角形を描いている。それぞれがコミュニティの活動のあり方を示している。下段の三角形は従来の活動の姿を、上段の三角形は将来のあるべき活動の姿、中段の三角形は過渡期の活動の姿である。現時点でのコミュニティの活動は中段の三角形となる。従来は村と地方政府との関係のみであった活動が、NGOの参加によって抜本的に変化した様子を描いている。特に、これまで放置されてきた遺跡が観光資源化されるという脱構築的創造が行われる段階である。そして、将来の希望的観測として村民が主体となった上段の活動へとシフトしていくことが期待される。

10、おわりに—先住民の文化財保護と観光資源化に向けて

シカチ・アリヤン村は、数年前の中国吉林省の化学工場の事故の影響による河川の水質汚濁のために、主たる生業である漁業が禁止されて存亡の危機に立たされている。それは直ちに同地のナナイ民族およびその文化や言語の危機に直結する。岩絵の採掘は、貴重な文化遺産を日本に紹介するというのが目的ばかりではなく、将来的には文化財保護とその観光資源化によって村の振興に役立てるという意味合いをもっている。村の次世代を担う有望な青年を日本に招いて観光学を研修させるという計画も進んでおり、今回の採掘もこうした地域振興の長期的展望に立った取組みの一環なのである。

今後に渡って考察していくべき課題は、先住民族の古代文化遺産の観光資源化による地域振興を、日本の特定非営利活動（NPO）法人がどのようなかたちで関わり協力していけるかとい

27 杉万俊夫編著『コミュニティのグループダイナミックス』（京都大学学術出版会・2006年）85頁

28 巻末（図3）古代岩絵遺跡の観光資源化の可能性を参照のこと。

う点である。現時点では、古代岩絵の調査および採拓を行って日本国内での展覧会を計画中であり、その段階までは特定非営利活動（NPO）法人ユーラシアンクラブが率先して事業を進めてきた。だが、その後の展開については未定である。当面は、先住民民族であるナナイ民族とNPO法人ユーラシアンクラブがコラボレーションして事業を進めていくことになるだろう。だが、将来的にはナナイ民族が自ら主体となって自分たちの村の振興を進めていくべきであると考えられる。その際に特定非営利活動（NPO）法人はどのような関わり方ができるのかを今後の実践を通して探っていく必要があると思われる。筆者も含めたNPO法人ユーラシアンクラブとサカチ・アリヤン村の村民との協同的实践を動的に把握して記述していく上で、研究者とその研究対象を集合流ととらえるグループ・ダイナミックスの手法は非常に有力なツールであると考えている。今後も同地域におけるコミュニティの再生をグループ・ダイナミックスの手法にのっかって追っていきたい。

<参考文献>

- 芹沢長介「オクラドニコフ博士とシベリアの前期旧石器」『考古学ジャーナル』（ニュー・サイエンス社・1982年10月）
- アルサーニエフ著、長谷川四郎訳『デルスウ・ウザーラ』（平凡社東洋文庫・1965年）
- アレクセイ・オクラドニコフ著、加藤九祚、加藤晋平訳『シベリアの古代文化—アジア文化の起源—』（講談社・1974年）
- 内田弘慈『拓本のすすめ』（国書刊行会・1992年）
- 梅棹忠夫監修、松原正毅+NIRA編集『世界民族問題事典』（平凡社・1995年）
- 大貫静夫『世界の考古学(視東北アジアの考古学)』（同成社・1998年）
- 荻原真子『東北アジアの神話・伝説』（東方書店・1995年）
- 風間伸次郎採録・訳注『ナーナイの民話と伝説』（小樽商科大学言語センター・1995年）
- 川端香男里、佐藤経明、中村喜和、和田春樹監修『ロシア・ソ連を知る事典』（平凡社・1989年）
- 菊池俊彦「オクラドニコフ博士—その生涯と業績」『考古学ジャーナル』（ニュー・サイエンス社・1982年10月）
- 佐々木史郎『北方から来た交易民—絹と毛皮とサンタン人』（日本放送出版協会・1996年）
- 斎藤君子「ナーナイのフォークロア調査報告1」『北海道立北方民族は博物館研究紀要』第14号（2005年）
- 斎藤君子「ナーナイのフォークロア調査報告2」『北海道立北方民族は博物館研究紀要』第15号（2006年）
- 杉万俊夫編著『コミュニティのグループダイナミックス』（京都大学学術出版会・2006年）
- 杉万俊夫編著『フィールドワーク人間科学—よみがえるコミュニティ』（ミネルヴァ書房・2000年）
- 鳥居龍蔵『人類学及人種額上より見たる北東亜細亜』（岡書院・1924年）
- 鳥居龍蔵『黒龍江と北樺太』（生活文化研究会・1943年）
- 鶴丸俊明「極東古代絵画の記録保存、分布調査事業から—サカチ・アリヤン遺跡等の調査—」『札幌学院大学学芸員課程年報7』（札幌学院大学学芸員課程・1994年）
- 『神々と王の饗宴—アンコールワット拓本展』（2003年）
- Harry Daniels, Anne Edwards, Yrjö Engeström, Tony Gallagher and Sten R. Ludvigsen “Activity Theory in Practice Promoting learning across boundaries and agencies” (Routledge・2010年)
- А. П. ОКЛАДНИКОВ “ПЕТРОГЛИФЫ НИЖНЕГО АМУРА” (НАУКА・1971年)
- Владимир Клаудиевич Арсеньев “Дерсу Узала” (Молодая Гвардия・Москва・1930年)

(図2) シカチ・アリヤンの岩絵分布図

シカチアリヤン (オクラドニコフ/サカチアリヤン) 岩絵 (ペトログリフ) 分布図

—第一ポイント～第六ポイント—

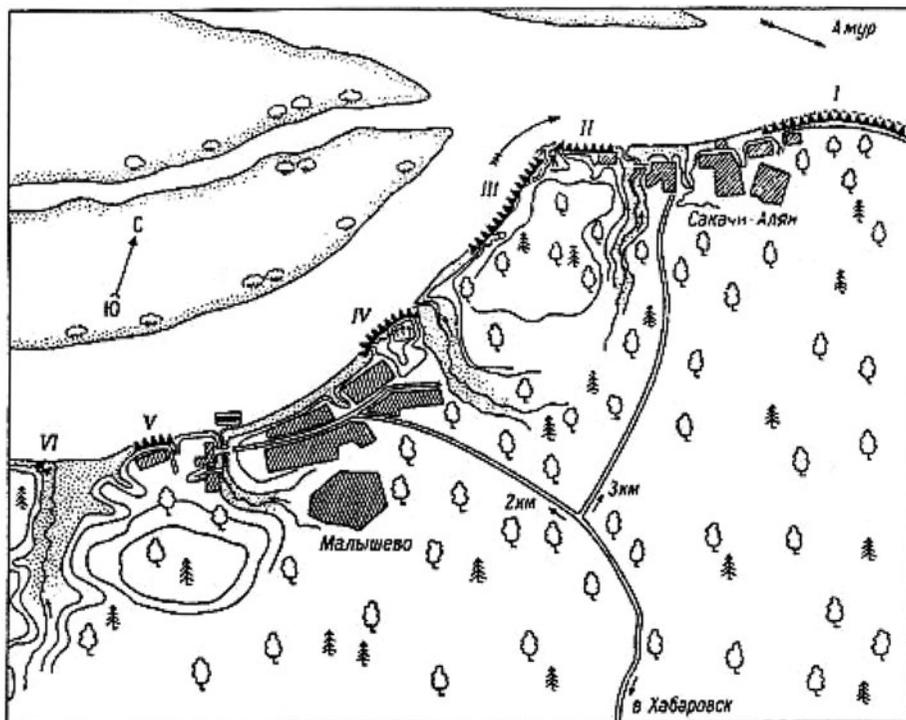
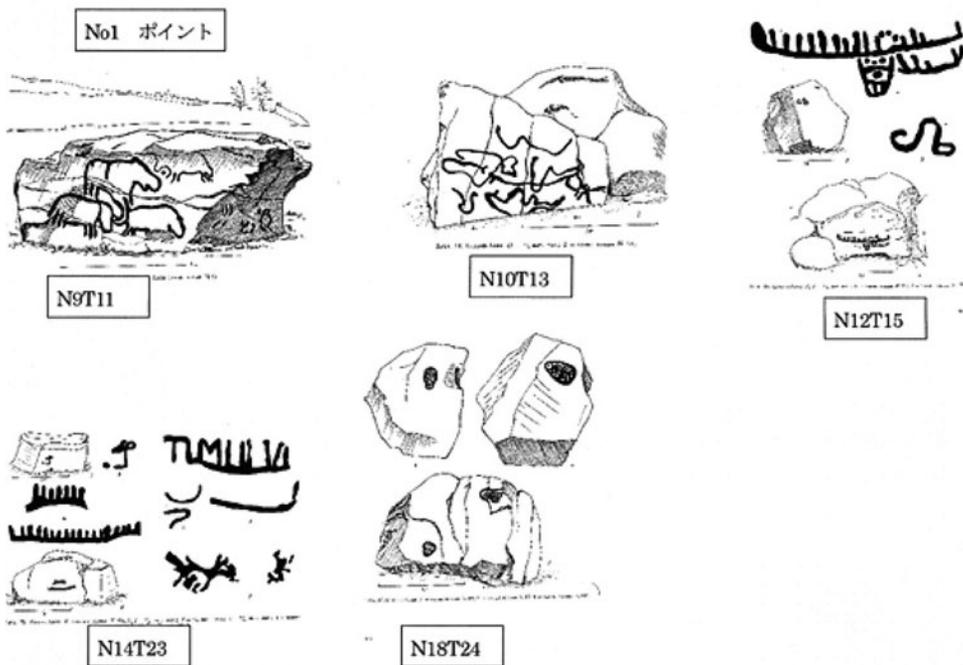


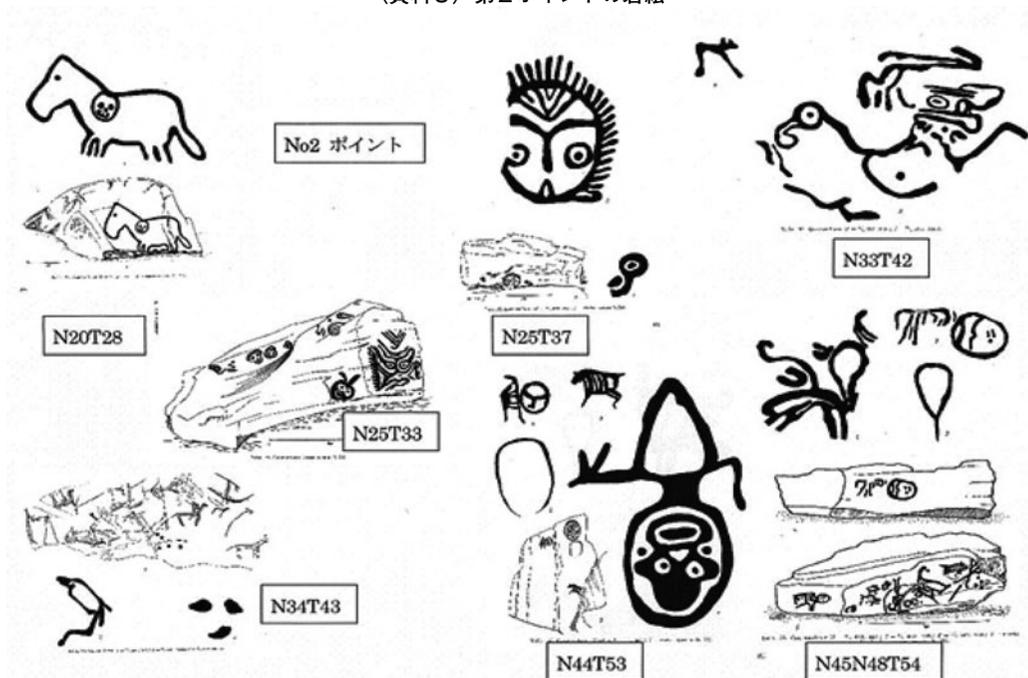
Рис. 8. Схема расположения петроглифов в районе Мальшево.

(図2) および(資料2～6)は、
 А.П. ОКЛАДНИКОВ “ПЕТРОГЛИФЫ НИЖНЕГО АМУРА” (НАУКА・1971年)
 による。

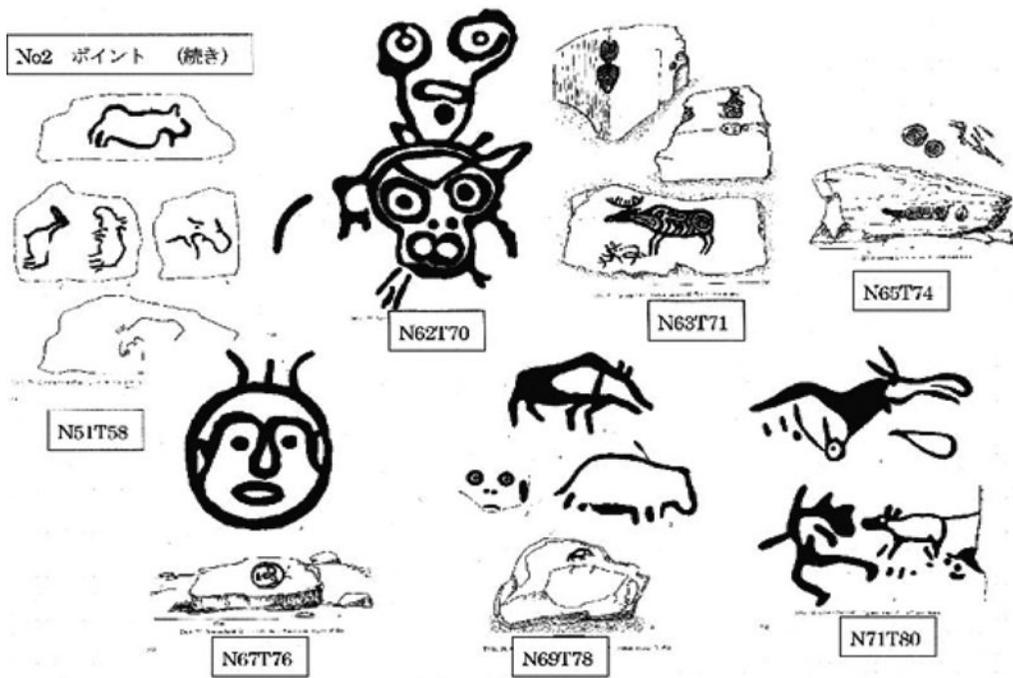
(資料2) 第1ポイントの岩絵



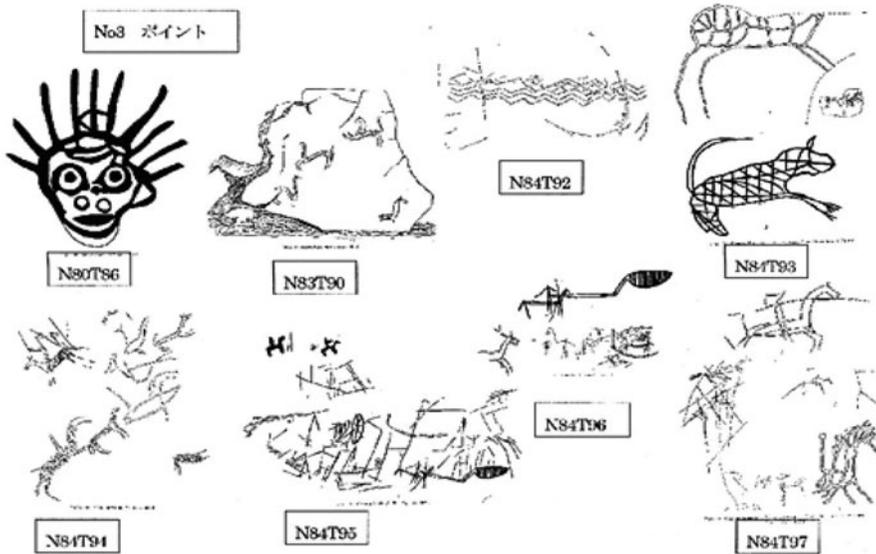
(資料3) 第2ポイントの岩絵



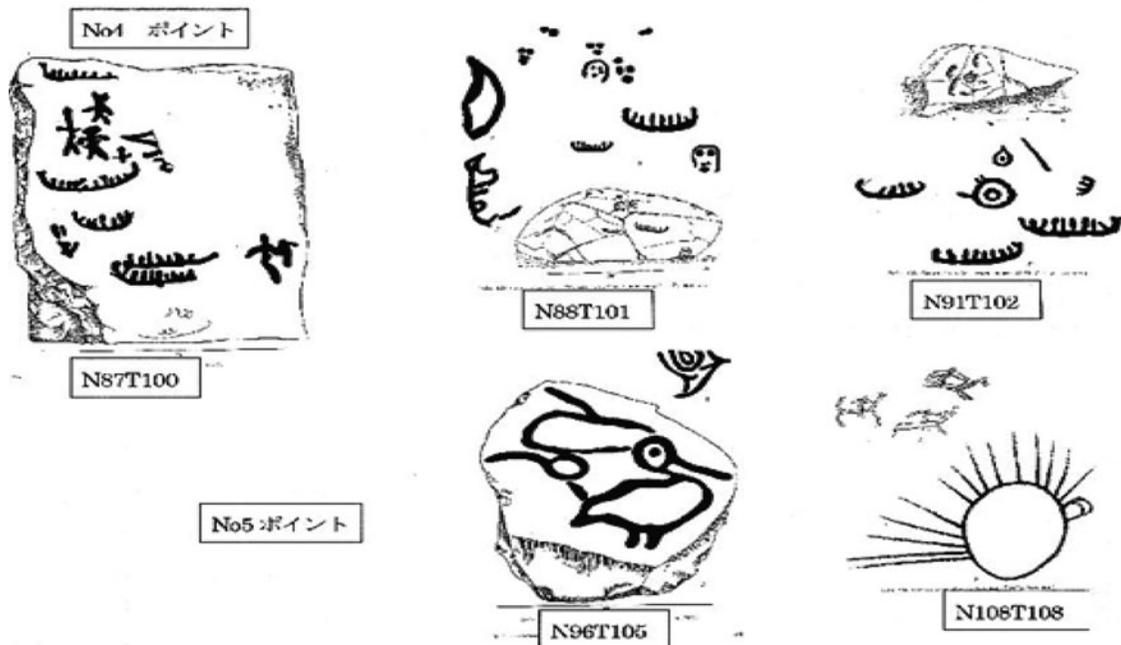
(資料4) 第2ポイントの岩絵 (続き)



(資料5) 第3ポイントの岩絵



(資料6) 第4ポイントの岩絵



(写真2) 岩絵の一例 (背中にマスクをつけた若駒らしい図像：第2ポイント)



(写真3) 採拓作業の様子



(写真4) 採取された拓本



(図3) 古代岩絵遺跡の観光資源化の可能性

